http://decfamily.p1.bindsite.jp/2017/

We 25R

No.262　17/09/06

『こころ』

現代文の宿題である『こころ』の感想文はちゃんと提出したであろうか。私が現代文を担当する２クラスからは、ほぼ出そろったが（ということは、まだの者も数名…笑）、面白い作品でありながら、同時に、教科書教材になるくらいだから、それなりに読み応えのある作品で、感想文を読んでいても、どうももう一歩、この作品の本質に迫り切れていないものが多い印象である。

感想を読んでいると、当然のことながら、先生とＫの自殺を話題にする人、それ故、先生とＫの人物像について考察する人が多いのだが、同時に、この作品がなぞを残したまま終わってしまっていることに関する不満？を述べる人も多い。先生は本当に自殺したのか？　列車の中で遺書を読んだ私はその後どうなったのか？　危篤状態の私の父はどうなったのか？　奥さん(静)はどうなったのか？…などといったことが、明確には書かれていないために､それが気になるというのである。ただし、これらの中には、もう一度「上」を丁寧に読むと、考えるヒントがキチンと書かれているものもある。

今後の授業では、それらの疑問をもとにしながら、それを解明すべく丁寧な読解がなされるはずである。もう一度、読みながら疑問に思ったことを自分なりにまとめておくと、授業をより積極的かつ楽しく受けることができるだろう。多くの人が挙げるＫの自殺の原因についても、この教科書に採録されている部分からだけでも、（明確に…とまでは行かないが）かなりきちんと読み取ることができるので、授業をお楽しみに。

ところで、漱石作品といえば、『坊っちゃん』を読んだことのある人が多いに違いない。

その中に、「山嵐」とあだ名される人物が登場する。最後には「おれ（坊っちゃん）」と心を通わせるのだが、当初は生徒を煽動して自分に楯突かせた犯人だと誤解し、「おれ」は「山嵐」と対立する。そこで、「おれ」はかつて「山嵐」におごってもらった氷水の代金一銭五厘を返そうと思い、「山嵐」の机上に置いておくのだが、「山嵐」の方はそれを頑として受け取らず、一銭五厘はいつまでも机の上に置かれ、それが、二人のモヤモヤした関係を象徴する、という場面がある。

この場面における「おごる／おごられる」という関係は、単なる経済的な貸借関係ではなく、友情に基づくものであると考えることができる。この金銭の貸借は、いずれは決済されるべき単なる経済的行為なのではなく、むしろそれが決済されないことによって、相互の間に社会的な紐帯を生み出すものとなっているわけだ。つまり、一銭五厘は、経済的な価値を表しているのではなく、互いの善意や友情を表しているのであり、それを返済することは、善意や友情を決済＝失効させることを意味しているわけである。

…などと、これは日常我々も行っている行為をもとに、この場面を社会学的に考察してみたわけだが、漱石作品には金銭をめぐる話題が多いことが指摘されている。『こころ』にも遺産相続の問題が出て来た。そんなことも踏まえながら読み進めていくと、『こころ』がどれだけ深い作品かが分かるに違いない。